

第14週(3月31日～4月6日)トピックス: <百日咳>

百日咳は2017年末までは感染症法上の5類小児科定点把握感染症に規定されていましたが、ワクチンの導入により患者は激減し、散発的な発生や家族内感染、また、学校・施設・地域内での集団発生の報告となっています。このため、2018年1月以降、より正確に発生状況を把握する目的で、5類全数把握に変更されましたが、現在、患者数が急増しています。

なお、診断したすべての医師は7日以内に届出なければなりません。

【患者数】

全数把握となった2018年以降の報告数の推移を見ると、本市で2018年に87例、2019年に113例と年間100例前後、全国では12,115例及び16,846例と年間1万人以上の報告がありました。しかし、2020年以降は新型コロナウイルス感染症の流行拡大に伴う感染予防の徹底等により、本市、全国ともに激減しました。しかし、2023年5月の新型コロナウイルス感染症の5類定点把握への移行後は再び増加に転じ、本年は既に14週時点で本市48例、全国は5,652例と前年の報告数を超過しています(表1)。さらに全国の年間累積報告数を過去同時期と比較しても、最も報告数の多かった2019年を超過しており、今後の発生動向に十分な注意が必要です(図1)。

【百日咳】

百日咳は百日咳菌の感染により発病します。感染経路は、鼻咽頭や気道からの飛沫感染及び接触感染で、通常7～10日間の潜伏期間の後発症します。症状は普通の風邪症状で始まり、次第に咳が激しくなります。その後、特徴的な短い咳が連続した咳き込み(スタッカート)の後、息を吸うときに笛の音のようなヒューという音が出る(ウープ)発作の繰り返しが約2～3週間持続します。息を詰めて咳をするため、顔面の浮腫、点状出血、眼球結膜出血、鼻血などが見られることがあります。その後、回復するにつれ、次第に激しい咳発作は弱くなりますが、時々発作性の咳があり、発症から回復するまでに2～3か月かかります。

なお、乳児では典型的な咳が見られないこともあります。重症化すると、無呼吸発作からチアノーゼを起こしたり、呼吸が止まり死亡する場合があります。

【予防等】

予防はワクチン接種です。定期的な予防接種では生後2か月から計4回の接種が必要です。予防接種をきちんと受け、乳幼児を百日咳から守りましょう。

百日咳は、初期症状では風邪による咳だと思い込み、受診も遅れがちです。百日咳菌は周囲への感染力が強く、症状が軽くても菌の排出があり、家族内で患者と接触した場合、感染リスクは非常に高くなります。特に、予防接種をまだ受けていない新生児・乳児が罹患すると重篤化しやすいので、周りの人が感染源とならないよう、手洗いや咳エチケットなど基本的な感染対策を徹底し、注意しましょう。また、自覚症状があれば早めに受診しましょう。

表1 京都市及び全国の報告数の推移

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年 14週
京都市	87	113	19	4	3	1	26	48
全国	12,115	16,846	2,819	707	491	1,000	4,054	5,652

図1 全国の累積報告数(2018年～2025年14週)

